乳幼児期の遊びと食事場面における親子相互作用促進プログラムの開発(1)

—「親自身が振り返る幼少期の遊び・食事場面尺度」と「子どもとの遊び・食事場面の振り返り尺度」の作成—

戸畑祐子(1)、小野寺敦子(2)
((1)目白大学大学院心理学研究科　(2)目白大学人間学部心理カウンセリング学科)

<要　旨>

Fraiberg(1975)は、親が乳幼児との問題に向き合う際に生じる負の感情を「赤ちゃん部屋のお化け」と表現し、親自身が内面に抱えるものにももっと焦点を当てた子育て支援を行うことの必要性を、実践や理論を通して伝えている。そこで、本研究では、親が乳幼児と向き合う場面として「遊び」と「食事」の二つの場面を取り上げ、その際の心的状態について焦点を当てることとした。そのため、親の生い立ちの振り返りについても、親自身の幼少期の「遊び」と「食事」場面についての振り返りを通して行なうこととした。したがって本研究では、親自身の過去と現在の「遊び」と「食事」場面でのアタッチメントを測定するための尺度を作成することを目的として行った。研究1では、「遊び」と「食事」での親自身の過去のアタッチメントについて振り返りを行い、それぞれ3因子構造の二つの尺度を完成させた。次に、研究2では、現在のお子さんとの「遊び」と「食事」場面でのアタッチメントについて、3因子構造の二つの尺度を完成させた。また、研究1、2ともに予備・本調査を通し、信頼性、妥当性が確認された。また、「親自身が振り返る幼少期の遊び・食事場面尺度」と「子どもとの遊び・食事場面の振り返り尺度」の間の相関から、親自身の幼少期の「遊び」と「食事」場面での親との経験が、現在の子どもとの「遊び」と「食事」場面での関係にも影響を与えている可能性が示唆された。これらの結果は、自分の幼少期の体験がその後の世代へと受け継がれ、再びその経験が現れるというように伝達されていくということを示唆している。このように、親自身の過去と現在のアタッチメントを測定する尺度が作成されたことにより、量的な面での一貫性のある結果を得ることが可能となったと考えられる。

<キーワード>

母親と乳幼児　遊びと食事場面　相互作用　アタッチメント　振り返り

【はじめに】

近年、乳幼児を育てる家庭や社会において様々な問題が生じており、乳幼児期の子育て支援の必要性が高まっている。乳幼児期の養育環境や発達要因などが乳幼児の心身の発達に影響を示している状況は少なくなく、乳幼児が心理的援助、精神医学的援助の重要な対象として位置づけられてきている。

とくに、乳幼児を取り巻く環境や存在として重要視されているのが母親であり、初期の母子相互作用は、直接乳幼児に影響を与え、発達に関わる大きな要因となることが指摘されている(馬場, 2000；窪田, 2005)。そのため、今日では、母親に対する支援や母子への早期予防・早期介入アプローチの必要性が高まってきている(佐々木, 2008)。

乳幼児精神保健の先駆者の一人であるSelma Horwitz Fraiberg(セルマ・フライバーグ：以下Fraibergとする)は、「早期の母子関係性への支援が、子どもの健康な発達を促進する」という信念のもと、母子関係の中で生じる様々な現象を精神分析的な視点から理論化し、早期介入モデルの提唱や家庭訪問相談の実践を行った。そして、彼女は、早期の母子関係へ大きく影響を与えるとされる「母子相互作用」に着目し、親と乳幼児に対して直接的な支援を行っていくことの意義を唱えた。

Fraiberg(1975)は、親が乳幼児との問題に向き合う際に生じる負の感情を「赤ちゃん部屋のお化け」と表現し、親自身が抱えている問題を振り返り、向き合うことを通して解決に向かわせていった。そして、親自身が抑圧された本音に気づき、その複雑な心的状態を‘抱える’ことができることで、好ましくない世代間伝達が進行することを防ぐことが可能となると述べている。

Fonagy (1995) も、自身の状態と向き合い、捉えることのできる母親は、子どもの内的な情緒的体験をも捉えることができ、子どもの感情

や意図を踏まえて子どもの行動を理解する能力が高いとしている。

このように、Fraiberg らは、親自身が内面に抱えるものにももっと焦点を当てた子育て支援を行うことの必要性を、実践や理論を通して伝えている。

そこで、本研究では、親が乳幼児と向き合う場面として「遊び」と「食事」の二つの場面を取り上げ、その際の心的状態について焦点を当てることとした。そのため、親の生い立ちの振り返りについても、親自身の幼少期における「遊び」と「食事」場面についての振り返りを通して行なうこととした。

したがって、乳幼児と親を対象とした「遊びと食事場面」による親子相互作用促進プログラムを開発するための試み（1）として、本研究では、親自身の過去と現在のアタッチメントを測定するための尺度を作成することを目的をとする。そのため、研究1として「遊び」と「食事」での親自身の過去のアタッチメントについて振り返りを行い、尺度を完成させる。次に、研究2として現在のお子さんとの「遊び」と「食事」場面でのアタッチメントについて尺度を完成させる。

【予備調査】

1．目的

「親自身が振り返る幼少期の遊び・食事場面尺度」と「子どもとの遊び・食事場面の振り返り尺度」の作成

2．方法

・調査対象者

2010 年7月、東京近郊の子育て中の親 75 名を対象に質問紙を配布した。分析の対象者となった親の総数は 70 人(回収率 93.3%)であった。（＊目白大学心理学研究 2011 に掲載予定。）

・調査の手続きおよび倫理的配慮

質問紙を直接手渡し、または郵送にて配布し、回答終了後は全て郵送により回収した。配布した質問紙には、調査への参加は自由意志であること、無記名回答とするため個人の匿名性は守られること等の倫理事項を記載し、紙面にて教示を行なった。

・質問紙の構成

①親自身が振り返る幼少期の遊び場面尺度

親自身の幼少期の遊び場面の振り返りを測定するために、Ainsworth et al.(1978)や戸田(1989)、青柳・酒井(1997)、酒井(2001)などの内的作業モデル尺度やアタッチメント尺度を参照し、母親の幼少期における遊び場面に関する質問項目を複数作成した。そして、安定した遊び場面、拒否的・回避的な遊び場面、アンビバレントな遊び場面の3つの領域において8項目ずつ(各尺度 24 項目ずつ)を選定した。母親自身の幼少期における遊び場面の振り返り尺度に関しては、各対象者が回答時に思い浮かべた「幼少期」に差異が生じる可能性が予測されたため、質問項目の前に「小さい頃とはいつ(何歳)頃のことであったか」といった質問を加え、記述してもらった。

②親自身が振り返る幼少期の食事場面尺度

①の尺度と同様の手続きで母親の幼少期における遊び場面に関する質問項目を複数作成した。安定した食事場面、拒否的・回避的な食事場面、アンビバレントな食事場面の3つの領域において8項目ずつ(各尺度 24 項目ずつ)を選定した。母親自身の幼少期における食事場面の振り返り尺度に関しても、遊び場面と同様に質問項目の前に「小さい頃とはいつ(何歳)頃のことであったか」といった質問を加え、記述してもらった。

③子どもとの遊び場面の振り返り尺度

現在の子どもとの遊び場面に関する質問項目にも①と②の尺度と同様に、3つの領域において8項目ずつ(各尺度 24 項目ずつ)を選定した。

④子どもとの食事場面の振り返り尺度

③と同様に、現在の子どもとの食事場面に関する質問項目を、3つの領域において8項目ずつ(各尺度 24 項目ずつ)を選定した。

⑤内的作業モデル尺度

尺度の妥当性を確認するため、戸田(1988)の内的作業モデル尺度（18 項目）を使用した。

①から⑤までの全尺度の回答は、「1．とてもそう思う」から「5．わからない」の5段階評定に統一し、設定した。本調査で使用した全尺度の質問項目は、計 128 項目であった。前段階の調査として、全尺度に関する質問項目について乳幼児を育てる親5名に実施した。結果、項目内容にやや不明瞭なものがあると指摘を受けた項目があったため、本調査では、いくつかの項目に修正を行なったものを使用した。

3．結果

まず、母親自身の幼少期における遊びと食事場面の振り返りに関するそれぞれの質問項目と、子どもとの遊びと食事場面の振り返りに関するそれぞれの質問項目の選択肢「とてもそう思う」－「全くそう思わない」に対して1点－6点を与え、各 24 項目(24×4：96 項目)の回答の平均値と標準偏差を算出した。平均値±1 SD を基準に項目分析を行なったところ、天井効果やフロア効果は見られなかった。そこで、

全項目を用いて、母親自身の幼少期における遊び・食事場面の振り返り、子どもとの遊び・食事場面の振り返り、子どもとの遊び・食事場面の振り返りに分け、それぞれ主因子法・プロマックス回転法による因子分析を行なった。結果、各尺度ともに３因子構造が抽出された。親自身の幼少期における振り返り尺度では、第１因子「安定した遊び(食事)」因子、第２因子「拒否的な遊び(食事)」因子、第３因子「不安・アンビバレントな遊び（食事)」因子と命名した。

【研究１】

１.目的

親自身が振り返る幼少期の遊び・食事場面尺度の作成

２.方法

・調査対象者、手続き

東京、埼玉、群馬等の子育て中の親(母親 550 名、父親 550 名)に配布。(母親：236 名回収、回収率 43％／父親：168 名回収、回収率 31％／163 組回収、回収率 30％)

・調査の手続きおよび倫理的配慮

本研究では、現在０～６歳までの乳幼児を子育て中の親(父親・母親)各 550 名に質問紙が入った封筒を、幼稚園・保育園・子育て支援センター等の職員を通して配布した。この封筒は父親用・母親用の２通が１セットになっており、別々に回答するように依頼した。回収方法については、独自に返送が可能なように別々の返信用封筒を同封した。質問紙には、以下の研究１、研究２で作成した項目等を含まれている。その他いくつかの尺度も含めて実施したが、本研究では、作成した尺度を主に分析を行なったものを報告する。

・質問紙の構成

予備調査と同様の内容のものを使用した。

３.結果

「親自身が振り返る幼少期の遊び・食事場面の振り返り尺度①、②」の二つの尺度ともに、対象の親 316 名分の結果の因子分析（主因子法、プロマックス回転)を行なった。固有値の変化より、３因子構造が妥当であると考えられた。そのため、再度、３因子を仮定して、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行なった。その結果、因子負荷量の絶対値.35 以上を基準に、尺度①では、３因子、16 項目を採用した（表１)。これは、予備調査の結果(戸畑, 2011)と内容的にほぼ同様の３因子構造が示された。そこで、第１因子「安定した遊び」（α=.90)、第２因子「拒否的な遊び」（α=.76)、第３因子「不安・アンビバレントな遊び」（α=.73）と命名した。

表1　「親自身が振り返る幼少期の遊び場面」項目の因子分析結果
(斜交プロマックス回転による結果)

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第1因子（α=.90）			
7. 私は母親と遊ぶことが楽しかった	.87	-.02	.02
15. 母親のそばで遊ぶことは安心であった	.81	.09	-.08
1. 私は母親と遊ぶのが好きだった	.77	-.04	.10
13. 遊びの中で母親に頼ったり甘えたりすることができた	.71	.13	-.01
4. 遊んでいるときに、母親は私のことを見守ってくれていた	.65	-.12	.25
10. 遊びの中で母親によく褒められた	.62	.16	-.05
第2因子（α=.76）			
16. 一緒にいるときに、母親は遊びに応じてくれないことがあった	.09	.74	-.13
14. 一緒に遊んでいるときに、母親は本当に私と遊びたくないのではないかと心配だった	.08	.74	.03
11. 母親は私と遊ぶことを好きではないと感じたことがあった	-.02	.71	.06
8. 私は母親に、一人で遊ぶことを求められているように感じていた	.07	.65	-.01
12. 私は遊んでいるときに母親がいなくても平気だった	.11	.44	-.08
第3因子（α=.73）			
3. 友達と遊んでいても、母親がいないと不安だった	.20	-.12	.68
6. 母親がそばにいないと遊ぶことができなかった	.07	-.06	.64
5. 母親の顔色をうかがいながら遊んでいた	-.27	.42	.45
2. 母親と遊んでいるときにびくびくしていた	-.10	.34	.44
9. 一人で遊んでいると母親を思い出して泣くことがあった	.15	.07	.38

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ
Ⅱ	.35	

尺度②(食事場面)においても同様の手続きをとり、3因子、15項目を採用した(表2)。そして、第1因子「安定した食事」(α=.90)、第2因子「拒否的な食事」(α=.77)、第3因子「不安・アンビバレントな食事」(α=.80)と命名した。したがって、これらの結果から、尺度①と②の内的整合性の高さが示されたといえる。

【研究2】

1．目的

子どもとの遊びと食事場面の振り返り尺度作成

2．方法

・調査対象者、手続き／質問紙の構成

研究1と同様の内容にて実施した。

3．結果

子どもとの遊びと食事場面の振り返り尺③、④の二つの尺度ともに、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行なった。尺度③は、3因子、10 項目の因子パターンが示され、第1因子「安定した遊び」(α=.68)、第2因子「拒否的な遊び」(α=.64)、第3因子「不安・アンビバレントな遊び」(α=.62)と命名した(表3)。

尺度④は3因子、14項目の因子パターンが示され、第1因子「安定した食事」(α=.82)、第2因子「拒否的な食事」(α=.81)、第3因子「不安・アンビバレントな食事」(α=.60)と命名した（表4）。

各尺度の信頼性は、各々の Cronbach のα係数より一定の信頼性が確認されたといえる。

尺度間相関と基準関連妥当性の検討

次に、基準関連妥当性を検討するため、「親自身が振り返る幼少期の遊び場面尺度」、「親自身の幼少期における食事場面尺度」、「子どもとの遊び場面尺度」、「子どもとの食事場面尺度」の4つの尺度間の相関係数を求めた(表5)。下位尺度間の相関には、有意な高い・弱い正、または負の相関が複数見られた(以下、相関の程度の表現に関しては、小塩(2004)の判断基準を参照する)。

また、各尺度の併存的妥当性を検証するため、研究1と2で作成した各尺度の下位因子の合計得点と「内的作業モデル尺度(3因子、18項目)」(戸田, 1988) の変数間の相関係数を求めた。その結果、戸田(1988)の「IWM」の下位尺度の「安定型」はそれぞれの尺度の第1因子である「安定した遊び」「安定した食事」との間の相関係数が(.41～.65)高かった。

表2　「親自身が振り返る幼少期の食事場面」項目の因子分析結果
(斜交プロマックス回転による結果)

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第1因子(α＝.90)			
7. 私は母親と食事をすることが楽しかった	.92	−.06	−.02
4. 母親と一緒の食事はとても安心感があった	.89	.04	−.08
10. 私は母親と食事をすることが好きだった	.86	−.08	.02
13. 食事のときに、母親は私のことを見守ってくれていた	.68	.07	.07
15. 食事のときに困ると、母親に頼ることができた	.64	.02	.10
1. 食事のときに、母親によく褒められた	.39	.22	.01
第2因子(α＝.77)			
14. 母親の顔色をうかがいながら食事をしていた	.01	.94	−.18
2. 母親と食事をしているときにびくびくしていた	.06	.85	−.13
16. 食事のときに、母親は私の呼びかけに応じてくれないことがあった	.03	.55	.16
5. 母親は私と食事をすることが好きではないと感じたことがあった	−.04	.52	.38
第3因子(α＝.80)			
6. 一人で食事をしていると、母親を思い出して泣くことがあった	.07	−.15	.80
11. 一緒に食事をしているとき、母親は本当は私と食事をしたくないのではないかと心配だった	−.11	.26	.68
9. 母親がそばにいないと食事をすることができなかった	.13	−.05	.63
8. 私は母親に、一人で食事することを求められているように感じていた	−.11	.37	.49
3. 他の人と一緒に食事をしていても、母親がいないと不安だった	.32	.04	.35

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ
Ⅱ	.29	
Ⅲ	.45	.70

表3　「子どもとの遊び場面振り返り」項目の因子分析結果
（斜交プロマックス回転による結果）

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第1因子（α＝.68）			
10. 子どもは私と遊ぶことが好きである	.84	.09	−.02
4. 子どもは私と遊んでいる時間をとても楽しんでいる	.80	−.04	−.05
13. 遊びの中で子どもを褒めるとうれしそうである	.40	.08	−.04
第2因子（α＝.64）			
16. 私の顔色をうかがいながら一緒に遊んでいるようなことがある	.23	.67	.11
5. 子どもは、私と遊んでいるときにびくびくしているように思う	.00	.55	−.04
8. 一緒に遊んでいるときに、子どもは本当は私と遊びたくはないのではないかと心配だった	−.17	.53	−.03
2. 私と遊ぶことを、子どもはあまり好きではないように感じることがある	−.37	.44	−.10
第3因子（α＝.62）			
6. 友達（または他の大人）と遊んでいても、私がそばにいないと不安になってしまう	−.03	.03	.66
3. 子どもは遊んでいるときに、私がそばにいなくても気にしないでいられる ＊	.04	.13	−.59
12. 私がそばにいないと子どもは遊ぶことができない	−.02	.14	.58

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ
Ⅱ	.21	
Ⅲ	−.38	.32

表4　「子どもとの食事場面の振り返り」項目の因子分析結果
（斜交プロマックス回転による結果）

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第1因子（α＝.82）			
15. 子どもは私との食事をとても楽しんでいる	.80	−.10	−.06
4. 子どもは私と食事をすることが好きである	.78	−.08	.03
7. 食事中に子どもを褒めるとうれしそうである	.69	.12	−.10
1. 私と一緒に食事をすると子どもは安心している	.61	−.07	.13
10. 食事のときに、子どもは私に見守られているように感じていると思う	.59	.03	.07
13. 子どもは食事の中で困ると私に頼ったり甘えることができている	.55	.13	−.08
第2因子（α＝.81）			
8. 子どもが、私と食事をするのを嫌がっているように感じることがある	.02	.78	.03
14. 私と食事をすることを、子どもはあまり好きではないように感じることがある	−.07	.77	.09
2. 一緒に食事をしているときに、子どもは本当は私と食事をしたくはないのではないかと心配だった	−.05	.74	−.08
5. 子どもは、私と食事をしているときにびくびくしているように思う	−.02	.70	−.05
11. 私の顔色をうかがいながら食事をしているようなことがある	.19	.55	−.01
第3因子（α＝.60）			
3. 私がそばにいないと子どもは食事をすることができない	−.00	.06	.69
12. 食事のとき私がそばにいなくても子どもは気にしないでいられる＊	.12	.16	−.52
6. 友達（または他の大人）と一緒に食事をしていても、私がそばにいないと不安になってしまう	.13	.12	.47

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ
Ⅱ	−.14	
Ⅲ	.28	.13

表5　「親自身の幼少期の遊び・食事場面の振り返り」
「子どもとの遊び・食事場面の振り返り」の下位尺度間相関係数(N=316)

	親自身の幼少期の遊び・食事場面の振り返り						子どもとの場面の振り返り					
	遊び安定	遊び拒否	遊び不安ambi	食事安定	食事拒否	食事不安ambi	遊び安定	遊び拒否	遊び不安ambi	食事安定	食事拒否	食事不安ambi
親自身の幼少期の遊び・食事場面の振り返り												
遊び安定	−	.40**	.44**	.85**	.30**	.47**	.22**	−.02	.10	.35**	.01	.16**
遊び拒否		−	.53**	.45**	61**	.58**	−.07	.23**	.05	.17**	.24**	.07
遊び不安ambi			−	.44**	.64**	.63**	−.12*	.32**	.17**	.05	.27**	.26**
食事安定				−	.34**	.50**	.22**	.01	.10	.36**	.01	.16**
食事拒否					−	.68**	−.11	.30**	.10	.02	.34**	.14*
食事不安ambi						−	−.12*	.24*	.14*	.11*	.29**	.22**
子どもとの場面の振り返り												
遊び安定							−	−.41**	.06	.51**	−.29**	.01
遊び拒否								−	.15**	−.12*	.60**	.07
遊び不安ambi									−	.17**	.17**	.51**
食事安定										−	−.04	.20**
食事拒否											−	.09
食事不安ambi												−

*p<.05, **p<.01,

戸田(1988)の「ＩWM」の「回避型」は、それぞれの尺度の第２因子である「拒否的な遊び」「拒否的な食事」との間の相関係数が(.44～.87)高く、「アンビバレント型」とは、それぞれの尺度の第３因子である「不安・アンビバレントな遊び」「不安・アンビバレントな食事」との間の相関係数が(.38～.58)高かった。よって、内的作業モデル尺度と全尺度(作成した①～④の尺度)との間には、強いまたは弱い正・負の両相関が概ね認められた。以上のことから、研究１、２において作成した尺度の信頼性と妥当性は十分であると判断した。

【考察】

本研究では、尺度①～④について、共通した内容の項目「安定」「拒否」「不安・アンビバレント」という３つの因子構造が確認された。採用された３因子に該当する項目は、第１因子では、親または子どもと安定した関係の仲で遊ぶことが（食事をすることが）できていたのか(いるのか)といった、相手との安定した遊び・食事でのアタッチメントパターンを示していると考えられる。第２因子では、親または子どもとの遊び（食事）は拒否的な関係の仲で行なわれていたのか(そうであったのか)といっ

た、相手との拒否的な遊び・食事でのアタッチメントパターンが示されていると考えられる。そして、第３因子では、親または子どもとの遊び（食事）は、不安・アンビバレントな関係の仲で行なわれていたのか（いるのか）といった、相手との不安・アンビバレントな遊び・食事でのアタッチメントパターンが示されていると考えられる。

親自身が振り返る幼少期の遊び・食事場面の振り返り尺度間の相関から、「安定した遊び」と「安定した食事」の間、「拒否的な遊び」と「拒否的な食事」、「不安・アンビバレントな遊び」と「不安・アンビバレントな食事」の間の相関から、それぞれは相互に関係していることがわかった。また、子どもとの遊びと食事場面の振り返りの尺度間の相関においても、同様の結果が見られている。よって、幼少期においても、現在の子どもとの関わりにおいても、「遊び」と「食事」の場面では主観的な自己評価では、同一のアタッチメントパターンの傾向が明らかになった。

したがって、「親自身が振り返る幼少期の遊び・食事場面尺度」と「子どもとの遊び・食事場面の振り返り尺度」の間の相関から、親自身の幼少期の「遊び」と「食事」場面での親との経験が、現在の子どもとの「遊び」と「食事」場面での関係にも影響を与えている可能性が示唆されたといえる。

これらの結果は、予備調査（戸畑・小野寺，2011）と同様の結果であり、Bowlby（1973）が「子どもは知らず知らず親を同一視し、その結果、親になったときには、自分が子ども時代に経験したものと同じ型の行動を子どもに対して示す傾向があるから、この相互作用の型が多かれ少なかれ、世代から世代へと忠実に伝達される」と述べているような、自分の幼少期の体験がその後の世代へと受け継がれ、再びその経験が現れるというように伝達されていくということを示唆している。このことを「世代間伝達（intergenerational transmission）」と言い、この伝達の鎖をいかにして断つかが現代の精神保健の課題の一つであると渡辺（2000）は述べている。

予備調査を含め、今回の結果においても親自身の幼少期と現在の子どもとの関わりは、相互に関係していることが明らかにされたが、下位尺度によっては、低い相関、あるいは相関が見られないものもあり、今後は他の要因との関連もさらに詳細に見ていく必要があるといえる。

【今後の課題と展開】

現在、今後行なう予定であるプログラム開発の試み（２）として、実際に家庭訪問にて面接調査を実施するための準備を進めている。面接調査への参加者は、試み（１）にてご協力いただいた方の中から希望者を募り、（２）の面接内容を説明・了承した方のみに行なう予定である。現在のところ、参加希望者（家庭）は、122 件であり、この中から条件（半年から１年以上に渡り縦断的に調査に参加可能かどうか）を満たすご家庭を選定し、実施する。そして、（２）の実践調査を今後行なうことにより、（１）の結果との関連性を検証し、量的・質的な両面からの結果を比較することを考えている。また、プログラムを完成させることを最終目的としている。

今回の研究で得た「遊びと食事におけるアタッチメントの世代間伝達」の結果を踏まえ、乳幼児と親の安定した関係性を目指した、早期の支援プログラムのさらなる検証を重ねていきたい。

【文献】

Ainsworth, M.D.S., Blehar,M.C., Waters,E., & Wall,S.(1978).*Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

青柳　肇・酒井　厚. (1997). アダルト・アタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係. 早稲田大学人間科学研究, 10(1), 7－16.

Bowlby, J.(1973). *Attachment and loss, Vol.2 Separation: Anxiety and Anger.* New York: Basic Books. (J.ボウルビィ：黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳) (1977/1991). 母子関係の理論Ⅱ　分離不安　岩崎学術出版社.)

Fonagy,P. (2001).Attachment theory and psychoanalysis. London: Other Press. (フォナギー，Ｐ．遠藤俊彦・北山修（監訳）(2008). 愛着理論と精神分析. 誠信書房.)

Fraiberg,S., Adelson,E., & Shapiro,V. (1975) *Ghosts in the nursery: A psychoanalytic approach to the problem of impaired infant-mother relationships.* Journal of the American Academy in Child Psychiatry, 14,397-421.

平井滋野・岡本祐子. (2003). 食事場面の会話と親子の心理的結合性の関連. 青年心理学研究, 15, 33－49.

小塩真司. (2004). SPSS と Amos による心理・調査データ解析－因子分析・共分散構造分析

まで．東京都書．
窪田庸子（2005）．母子相互作用と子どものパーソナリティ発達に関する文献展望．社会環境研究．
中谷奈美子・中谷素之．（2006）．母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響．発達心理学研究，17(2)，145 - 158．
西澤　哲．（1994）．子どもの虐待：子どもと家族への治療アプローチ．誠信書房．
酒井　厚．（2001）．青年期の愛着関係と就学前の母子関係－内的作業モデル尺度作成の試み．性格心理学研究，9(2)，59－70．
瀧川由美子．（2003）．幼少期のアタッチメント形成が青年期に与える影響について－幼少期のアタッチメントの連続性から考える．奈良文化女子短期大学，34．41－47．
詫摩武俊・戸田弘二．（1988）．愛着理論からみた青年の対人態度：成人版愛着スタイル尺度作成の試み．東京都立大学人文学報，196，1－16．
寺本妙子，他．（2008）．４歳時点の子どもの発達と早期母子相互作用および母親の精神的健康との関連：日本人母子における予備的研究．小児保健研究，67(5)，706－713．
戸畑祐子・小野寺敦子．(2010). Selma Fraibergの理論・治療アプローチ．目白大学心理学研究，6．67－79．
戸畑祐子・小野寺敦子．（2011）．遊びと食事場面でのアッタッチメント尺度作成の試み.目白大学心理学研究，vol.7,29-43.
戸田弘二．（1988）．青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業仮説(working models)からの検討．日本心理学会第52回大会発表論文集，27．
浦山晶美・西村真実子．（2009）．母親の内的ワーキングモデルと虐待的な養育態度との関連性．日本公衛誌，（4），223－231．
渡辺久子．（2000）．母子臨床と世代間伝達．金剛出版．
横井紘子．（2006）．保育における「遊び」の捉えについての一考察　－現象学的視座から「遊び」理解の内実を探る－．保育学研究，44(２)，93 - 103．

【謝辞】

御指導いただきました今野裕之准教授、ご協力いただきました幼稚園、保育園、子育て支援センターの職員の方々、お父様、お母様方、調査の収集に協力してくださった皆様に深く感謝申し上げます。